慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森戸辰男訳 近世社会主義思想史
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.5 (1921. 5) ,p.752(160)- 755(163)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210501-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

森戸辰男譯　近世社會主義思想史

我等社發行
定價金貳圓參拾錢

墺太利の法學者故 Anton Menger 著はすところの「全勞働收益權」Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag, I. Aufl. 1886, III. Aufl. 1904 は當に夙に飜譯せらる可くして未だ其事なかりし名著の一なり。近時社會問題を論ずる價値なき俗書の頻々として譯出せらるゝことを顧みれば森戸氏の譯本は出づること寧ろ甚だ晩しと云はざる可からず。この原著の功績は廣汎なる社會主義文書の渉獵に基づきて所謂「科學的」社會主義以前の英佛社會主義論客を、不當なる遺忘と閑却とより救ひ、以てその獨逸社會主義に對する影響を明にしたること、及び法理學にて鍛錬せる頭腦を以て、社會主義諸派の要求中に含まれたる全勞働收益權、生存權及び勞働權なる三大經濟的基本權の本質と、その相互關係を明確にし、且つ此の三者の如何なる社會組織の下に實現すべく、如何なる社會組織の下に實現すべからざるかを論究し、此の二方面に於て共に學者研究の新境地を開拓せること是なり。

第一の研究の結果として Menger は「現今ドイツ、に於て、マルクスとロードベルツスとの著作が過當に高き評價を受けてゐること」は「イギリス及フランスの社會主義特にその前期のものを殆んど全く知らないでゐた」に由ること多きものなるを言明す（第一版序文）。即ち彼に從へば「マルクスは「前期の英國社會主義者、殊にキリヤム、タムスンの影響の下に立つ」ものにして「……剩餘價値理論の全部即ち剩餘價値の概念その名稱、その額に關する考察は、主としてタムスンの著書から獲來つたものである。」而してマルクスは特に不勞所得の一形態（利潤）のみを眼中に置き、且つ生產資料及用費物に對する私有財產の法理的批判と全勞働收益權の根本的説明とを閑却せるを以て「凡て此等の傾向に於ては、タムスンは遙かにマルクスに優つて居り、從つてタムスンの著書は社會主義の基本著作と認め得るもの」、（一六六―七頁）またロードベルツスに到つては、その「不勞所得の本質及成立に關して……述べて居る見解は、既に彼に先つて前代のイギリス社會主義者のみならず、サンシモニスト及プルウドンに依て明言されて居る所である。直接にはロードベルツスは疑もなく……フランスの社會主義から、彼の思想を獲來」りしものなりと謂ふ（一三九頁）。此論斷は評者を以て見れば過酷に失するの嫌ありと雖も（假令 Marx が Thompson の餘剩價値説に負ふところ大なりしとするも、Marx 系統の根幹をなせる唯物史觀は之を英吉利前期社會主義者の言説中に求む可からず、又 Rodbertus が一八三七年の處女作には、明かに後年思想の萠芽を認め得るを以て、少くも一八四一年 Qu'est ce que la propriété? を著はしたる Proudhon をその思想上の父と斷定するに對しては服せざるものあるべきなり）また眞理を含めることを否認す可からず。Thompson の分配論が Collmann に依て獨逸語に飜譯せられ（Untersuchung über die Grundsätze der Verteilung des Reichtums. Berlin 1903-4）W. Godwin, C. Hall, J. Gray, T. Hodgskin, V. Considerant, P. Enfantin 等の著作が Georg Adler 編纂 Hauptwerke des Sozialismus und der Sozialpolitik 1904-8 に收錄せられ、更に近時十九世紀前半の英吉利社會主義者を研究するもの漸く多からんとするが如き、何れも直接間接 Menger の先蹤に導かれたるものとなすも甚だ失當ならざるべし。

「歷史的叙述によつて確實なる基礎を得たる後」Menger は「全勞働收益權を學理的にも詳細に説明」す。彼の示すところに由て觀れば、全勞働收益權はその消極的機能、即ち一切の不勞所得を不當として排擊する意味に於ては、凡ての社會主義者の承認する所たるのみならず、此の承認の一事は即ち他の有ゆる改良的主張より社會主義を區別する特徴的根本思想たるものな

り（二六〇頁）。然るに凡ての勞働者をして全生産物よりその自ら作出したる全價値を收得せしめよとの積極的意味に於ける全勞働收益權に至つては猶ほ細密の考究を必要とす。而してその結論を要約すれば、「全勞働收益權は…土地及資本の私有を承認する…今日の社會秩序とは納鑿相容れ難きものである。個別使用を伴ふ共有財産を規定する法律秩序に於ては、全勞働收益權は自然的分配原理である。併し共同使用を伴ふ共有財産の行はるゝ所の共産主義的に組織された社會に於ては、全勞働收益權の實行は、それ自身不可能ではないが、斯樣な結び付きに對する實踐的困難は非常に大きい。從つて此の如き社會に於ては生存權が財の分配の自然的基礎と認められなければならぬ」（二八二―三頁）而して「今日の社會的發展は」全勞働收益權の實現よりも「多くの徵候より推して考ふれば…生存權の實行に向つて居るやうである」（二八五）と云ふに在り。

Menger は唯物史觀を是認せず。歷史上の大事件の如何なるものも全然經濟狀態の影響を被らざるものなきも亦その如何なるものも單なる經濟狀態のみよりしては之を說明すべからずとなす（二〇九頁）と同時に近時屢々 Marxismus の精髓なりとして主張せらるゝ勞働者獨裁の說に左袒せざるものなり。蓋し「社會問題は政治問題のやうに一夜の間に解決せらるべきものでない。」今日の法律秩序に「必然起るべき變化は恰も吾々の今日の社會秩序が數百年の間絕えず封建制度を破碎壞敗し來り、結句唯の一擊で以て之を全廢することが能きる迄に至つたやうに、長き歷史的發展の方法によつて行はるべき」（二八五頁）を以てなり。而して此見解に對しては譯者森戸氏が漸く「多くの疑問を懷くに至」りしと云ふ（序文四頁）に拘らず、評者は今猶ほ之を棄つべき理由を知らざるものなり。今日一擊にして社會主義社會の實現すべからざるは猶ほ一擊にして封建制度の復活すべからざるが如しと信ずるを以てなり。

森戸氏の譯筆は周到精密原著に謂へるところ傳へて遺憾なし。嘗て森鷗外博士その飜譯「審美極致論」の凡例中に記して曰く「飜譯義を謬る、以て飜譯と稱するに足らず。義を傳へて正しきことを得ば、善きことは即ち善からん。未だ美を盡せりとは謂ふ可からず。若し能く筆墨の間、作者の口吻を髣髴するに至らば飜譯の能事畢れるに庶幾からん」と。今評者は平生歐文の書を讀みて其理義を解するも、原文の趣致を味はふこと甚だ不充分なるを嘆ずるものなれば、「社會主義思想史」が果して能く「飜譯の能事」を盡せりや否やを云ふこと能はずと雖も「義を傳へて正しき」の一事に至ては原著を併讀したる凡ての人と共に幸に之を言明して憚らざることを得るものなり。（一些事を指摘すれば、三四頁、二月革命假政府の宣言中「假政府はその屬する勞働者に人件費 le lase civile より一百萬フランを支給す」とあるは「王室費より一百萬フラン」とすべきものにあらざるか。）森戸氏は曩に雜誌「改造」（大正九年十一月號）に一文を寄せて Anton Menger の人物業績を論評すること甚だ詳細親切なりき。今氏に斯の如き良飜譯の業ある素より其處ならんのみ

（小泉信三）

加田哲二著　「經濟價値論」

東京國文堂發行
定價二圓五十錢

現時に於ける少壯有爲の經濟學者たる著者によりて公にせられし「經濟價値論」が熾烈なる研究心の結晶たると共に讀書界の眞摯なる要求を充分に滿足せしむる勞作たることに就きては、既に高橋、小泉兩敎授の序文中に裏書せられしを以て、評者は單に本著の內容に關し、之れが主要なる點を紹介し、以て著者の眞摯なる努力に報んと欲す。本著は著者が序文中に指摘せられし如く、今日に至る迄の經濟學上に於ける中心問題たる價値論に關する研究にして、其內容は前、後兩篇に分たれ、前者は著者自からの研究になる價値學說の史的研究にして、後者は墺太利學派の價値論を最も簡明精確に紹介せりと稱せらるゝ W. Smart, An introduction to the theory of Value の全譯なりとす。